



2期生 (経営学部/経営学科)

# 加武田 一貴 「面白そう」から始まるチャレンジ



## 01 生まれと育ち

### サッカーに打ち込んだ少年期

1995年(平成7年)、真実な父親と社会的な母親の元に、大阪府で生まれた。父親は仕事柄、職場に泊まることが多く、基本的には家にいない人だった。休日たまたま家にいる父親に人見知りしてしまうことがあったぐらいだった。でもそれが普通だったし、父親とはそういうものだとも思っていた。

そんな中、小学校1年生のときにサッカーと出会った。その後、高校卒業までの約12年間サッカーを続けた。小学生の頃に厳しい監督に教わったことで根性がついた。中学生の頃には、大阪府の選抜に選ばれるなど、着実に技術を伸ばすこともできていた。高校では週6日、練習に励み、とにかく、サッカーを中心にした日々を送っていた。

キャプテンを務めた際は、なかなか思うようにいかず、苦労することもあったが、先頭に立ち皆を引っ張っていくことで勝つ時はかなり達成感があった。サッカーを続ける中でしんどいことも多かったが、チームで勝ち進めたり、選抜に選ばれたり結果が目に見える形で出ていたので頑張れていた。



## 02 大学生になってからのこと

### むすびわざとの出会い

高校3年生、9月のサッカー部引退と同時に、大学進学を決意する。

2カ月後の11月の公募推薦入試に向けて、勉強脳にスイッチを入れ替え、本番までの見通しを立て、すさまじく実行に移した。そして、見事に京都産業大学の経営学部合格することができた。それまでの努力が報われたことが何より嬉しかった。

入学後1年間は、大学の授業と並行して、近所のお好み焼き屋と学習塾での講師の2つのアルバイトに精を出していた。そして、大学に通い始めて1年が経たとうとする頃、ふとあることを思うようになった。

「何をしに大学へ来たのだろう」。そもそも、京産大に進学する決め手も、「京都という町への憧れ」や「入試科目に苦手な古典がなかった」という消去法での選択でしかなかった。入学することだけが目的になってしまっていて、「入ってからやりたいことを見つけれればいいのか」という軽い気持ちで大学に入学してしまっていた。

2年生になる前、周りの子たちはほとんどやりたくないことや、次の進路が決まっていた時期で、とても将来が不安になっていた。入ったかっ学部ゼミにも落ちてしまい、ますます大学へ通う意味が分からなくなっていた。

そんな中で出会ったのが「むすびわざこ」オーププログラム」であり、「東田先生」だった。やりがいを感じることでできそうなプログラム内容。そして何より先生の言葉ひとつひとつから、しみ出るような大きな熱量に惹かれたことで「面白そうだ」と思いチャレンジしてみようと思った。



## 03 長期有給インターンシップ

### 仕事のおもしろさを実感

大学3回生の春学期に長期有給インターンシップに参加することとなる。勤務先は、Jリーグ所属のプロサッカークラブ運営会社、株式会社京都パープルサンガ。いくつか部署がある中で、主に週末のホームゲームイベントの企画運営を担当している広報部が配属された。そこで、実際に社の人の方々と同じように、4カ月間働かせていただいた。

私はあらかじめ、実習に参加する前に、社会で自分の力を試したいという思いから、「ホームゲームイベントを企画し実行する」という目標を持ち、インターンシップに挑んだ。しかし、実習中盤の6月時点で、まったく達成の目標が立っていないかった。企画の提案もできていなければ、企画を実施する日程も決定していなかった。

そんな時、上司との面談があった。そこで、自分の現状に対する痛烈なダメ出しがあった。「何をしに実習に来たの?」「もう4カ月終わっちゃうよ?」「などと、かなり厳しいことを言われた。そして私は気づいた。ここは与えられてる環境ではないのだと。「このままではだめだ」。と誰が見てもわかる状況。私は自分で企画を提案するために、新聞・雑誌・過去の資料を読み漁った。そして上司の方に頼み込み、実施できるように働きかけた。企画書も何度も提出し、それまでの2カ月では見せることがなかった主體的な行動を起こした。その結果、事前に設定した「イベントを企画し、実行する」という目標を見事に達成することができた。そしてイベント当日、考えたことが形になったこともそうだが、満足して帰っていくお客さんを見られたことが、すごく嬉しかった。

そういった4カ月間を通して、「仕事とは、自分で作り出すものだ」と理解できたことが私の一番の大きな学びだと思っている。自分で何かを提案し、実現に向けて資料をそろえたり、根回しをしたりしていく仕事の面白さを実感することができた4カ月間であったと思う。



## 04 これからのこと

### 生きた証を刻みたい

将来的に成し遂げたいことは、何か形になるもの・人の心に残る何かを作り出すこと。今はまだ、全く具体的ではないが、「〇〇を作った・〇〇を成功させた加武田」と言われるようになりたい。なぜなら、生まれてきたからには死ぬまでに何かを残したいし、志を持ち、米沢藩の国造りに邁進した直江兼続のように社会の発展に繋がるものを残したいと思っているからだ。インターンシップに参加したことで、1から何かを作り出す面白さを学んだことが関係していることは間違いないだろう。

## 05 大事にしたいこと

### 慣れを嫌い、チャレンジし続ける

今いる環境に慣れてしまったり、当たり前になってしまったり、知識への欲求がなくなったり、好奇心がなくなったり、ハングリーでなくなってしまうたら成長は止まってしまおう。何か形に残るものを作り上げていくために、「面白がること」「チャレンジすること」は、必須だと思っているからだ。だからこそ、これからは慣れを嫌い、常に好奇心を刺激できるようにしていきたいと思っている。

## 長期有給インターンシップに参加

株式会社京都パープルサンガでの長期有給インターンシップに参加。「仕事」というものに触れ、今までの「当たり前」では通用しないことに気付いた。

20歳

## プロフィール

1995年10月5日生まれ、大阪府出身の加武田一貴。小学生の頃からのあだ名は「かぶ」。趣味は、友達と近所の銭湯に行き、最近あった他愛もない出来事について話すこと。大学2回生の春から、2期生としてむすびわざこオーププログラムに参加。プログラムの一環で参加した長期有給インターンシップでは、Jリーグ所属のプロサッカークラブを運営している、株式会社京都パープルサンガの広報課スタッフとして勤務。

## お笑いコンートを披露する

高校2年の文化祭のオープニングで、有志を募り、お笑いコンートを披露。そこで初めて、「何かを作り出す」こと面白さを実感することができた。

17歳

## サッカーに打ち込む

小学校1年生の時に地元のサッカークラブに入った。その後、高校3年生まで続ける。

7歳

## 先輩・後輩からのメッセージ

### 向坂なつみ (1期生)

「えへへ」と笑う笑顔が特徴的で、人当たりが良い。出会った当初から、人と違う面白いことを求める姿勢があった。チームが混乱していても、冷静に対処出来るのが彼の強みだと思う。

### 江崎友規 (3期生)

加武田さんは、本当に優しさの塊です。マッチングプレゼンの際にアドバイスを頂いたのですが、自分勝手な僕に優しく接して下さいました。加武田さん、大好きです。